



言霊の会の新しい出発に当って

読者の皆さん、今日は。昨年五月より今日まで一ヶ年近くご無沙汰しました。謹んで「ご免なさい」を申し上げます。

ご無沙汰の第一の原因は病気であります。十数年前に患った大病の後遺症だそうで、熱は出ないのですが、痰と咳が激しく、食欲減退し体重が三十五キロにまで減り、今考えるところも生きて来られたものだと思います。それでもお陰様で体調は徐々に回復し、まだ咳き込むことはありますが、元気が出てきました。呼吸不全のため酸素ボンベのお世話に二十四時間頼ることとなり、長時間の外出は出来ない身の上とはなりましたが、家の中で仕事をする限り、余り不自由のない昨今まで戻って来ました。体調についての報告は以上であります。

休刊の第二の理由は著者自身、私の精神的なものでした。この原因の方が肉体の原因より、ズーツと大きかったと思われまふ。昨年の休刊直前の会報で言霊百神の原理の最終結論である三貴子みはしらのうずみこに入る入口となる神直毘、大直毘、伊

豆能売の神名を取り挙げました。理論的・概念的には分かっている事柄です。その理論については今までの会報の各所で説明して来ました。特に「大祓祝詞おほはらひのりと」の解説では「光と影」「善と悪」として詳しくお話しました。その論旨を簡単に言いますと次の様になります。「悪とは実際には存在しないもの、強いて言うならば悪とは、善とは何かを自覚するため

※

の前後を抜き書きしましょう。
古事記の直毘の出現する所（「古事記と言霊」一三三三頁）

「八十禍津日の神。次に大禍津日の神。この二神は、かきたの穢きたなき繁しき国に到りたまひし時の、汚けがれ垢けによりて成りませる神なり。次にその禍まがを直たださむとして成りませる神の名は、神直毘の神。次つぎに大直毘の神。次に伊豆能売。」

古事記が説く「禊祓みそぎはらひ」という人類文明創造の仕事が、黄泉国の罪穢の救済を、言霊の光の中に引き上げて、その光の文明の内容として同化させる事だ、と説きました。その実際のやり方を明らかに示すのが神直毘、大直毘、伊豆能売の神名でありました。更にその光の救済とは、従来の宗教が行なつて来た個人の魂の救済だけではなく、人類全体を救済することが出来る文字通りの光の存在を実際に証明するものでなければならぬ事でありました。個人の魂の宗教的救済は、罪に悩む人に言霊アの愛と慈悲の光の存在を知らすことによつて果たすことが出来ます。けれど混沌

する現在の地球上の人類を救済することは不可能です。それを可能にする唯一の手段は言霊アの自覚を超えた言霊エとイの光の自覚であります。

昨年五月以降、言霊の会の会報「コトタマ学」の原稿を書き筆者、私の筆がピタリと止まってしまいました。その時まで、人類の秘宝であり、日本民族のアイデンティティである言霊布斗麻邇の原理が秘められた古事記の神話の謎を解き、その人間の心の道理を自らの心の内に照らして証明し、その証明された真実を、会報を通じて何一つ隠すことなく皆様にお伝えして来ました。この心の持ち方は言霊学の先師小笠原孝次氏の手法を文字通りそのまま受継いだものです。その筆が止まってしまいました。この時より筆者の悪戦苦闘が始まりました。言霊アの宗教的救済の自覚、たとえば禅宗が称える「空観」から言霊学の言霊イ・エの自覚の進化への勉強と模索が始まりました。

悪と影の中にいて善と光を求めること、その中に踏み込んで行った私は学生だった昔、興味深く読んだドイツの詩人ゲーテの小説「ファウスト」を思い出したものでした。ゲーテ自身を模したファウスト博士を小説の主人公に登場させ、そのファウストが、信仰上の全能の神（天帝）と、自分の心の底にあつてすべての悪を喰す悪魔であるメフィストフェレスとの間に板ばさみとなり、その中で人間ファウストの光と影、善と悪を浮き彫りにして行く物語であります。初めて「ファウスト」を読んだときから六十余年が経ちま

したが、忘れずに思い出すのは、メフィストフェレスの小説の中の一言です。「おれは手練手管で人を不幸におとしられようと謀る。人はどれもその罫にはまり、悩み、苦しむ。気持ちがいよいよたつたらありやせぬ。けれど何とも口惜しいことに、その苦しみ、悲しみが、天帝の人の魂の救済の端緒となつてしまうことだ。結局は我メフィストフェレスは天帝の召使なのか……。」（六十年以上前の記憶です。間違っているかも知れません。御容赦の程を。）

以上のメフィストフェレスの嘆きの言葉を位置を換えて救いの天帝の方から考えてみましょう。人は悲しみ悩む時、孤独で心は闇です。その時、「でも私は今・此処に生きている。生かされている。有り難いことだ」と気付かせ、大きな大きな喜びに浸らせる力、それが神の恵みです。この時、人は儲かった、得をした、とかいう喜びとは違った一段次元が上の喜びに浸ることが出来ます。生きていることの有難さです。神のふところに抱かれていく喜びです。言霊アの自覚です。信仰の喜びです。けれどこの喜びに四六時中果てしなく浸っていることは出来ません。喜びが途絶える時、メフィストフェレスの暗からの声が届いてきます。天帝は忙しくなります。人が光の中のみ生きている自覚がないことを天帝は知っているのです。小説の中でファウストを演じたゲーテはその死に際し「Mehr Licht!」（more light、もっと光を）と言って亡くなったと伝えられているそうです。ゲーテだけではありません。人類の第二物質科学文明

時代に突入して三千年、この間の人類は誰一人として言霊アの光より更に上の次元の言霊イ・エの次元の光の中に住むことが出来ませんでした。この時代を生きた聖人と謂われた人も「もつと光を」と言つて死んだのです。否、聖人なるが故に、生の本来が光だ、ということに気付き「もつと光を」と言うことが出来た、というべきでしょうか。

「次にその禍を直さむとして成りませる神の名は、神直毘の神。次に大直毘の神。次に伊豆能売。」と古事記にある三神とは、宗教上の神である言霊アの更に上なる次元、言霊イ・エの光の自覚、人間の一切の行為を所得しめる光そのもの、のことを言っている、と気付かせてくれます。言霊イ・エの次元とは生命そのものとその活動の次元であります。そして言霊の会に求められていたのもこの次元の光の自覚であつたのです。

筆者の言霊イ・エの心中における確認の作業が始まりました。言霊イ・エの自覚への試行錯誤が続きました。以前にはこの言霊イ・エの自覚とその実行というものは、言霊学の上で理論的に明らかにされていさえすれば、その実行の時が来るとその実行者の自覚として蘇つて来るもの、とばかり思っていました。けれどそうではないようです。禊祓の原理の自覚そのものも人類の歴史創造行為として努力して自覚すべきものであることが感ぜられたのです。更に明言するならば、現世界に生きる人間の努力によつてその法が自覚された時、その時が世界の禊祓の開始の「時」なのです。人類は第一精神文明、第二の物質科学文明に続いて

第三の新文明創造の出発点にあつて、皇祖皇宗の御経綸の下、その発進の号砲を鳴らすのはこの世に生を受けた人間の自覚された創造行為でなければなりません。

先に言霊イ・エは言霊ア（宇宙）の内容としてある、とお伝えしました。ただ「ある」と言わず「内容としてある」などと難しい言い方をしたのででしょうか。それは言霊アという現象が現われる元の宇宙（空）を自力の信仰例えば禅宗の坐禅によつて求めたとします。自我を構成する経験知を一つ一つ確認し、その経験知識は本来の自分ではなく、単なる現象に過ぎないと否定する時、心の本体は広い広い宇宙そのものであることが分かります。宇宙は透明広大で塵一つとどめない永遠・無限であることが分かります。人間の思惟は此処までであり、此処より先へは行くことは出来ないのだと知ります。ここから先に何があるのか、ないのか、考えても無駄だと知ります。

皆さん。この空の向こうには人間の心は行けない、と知ること、が人類にとつて物事を認識するのに如何に大切な、を頭にしっかりと受けとめておいて下さい。この認識の上立って初めて人類は自らの心の内外の一切の現象を正しく知る立場に立つことが出来るようになります。

此処より先へは行けない、と知つたらどうしたらよいでしょうか。日本人の遠い聖の祖先（皇祖皇宗）は賢明な方法を発見しました。一切の出来事が始まるうとする地点に戻るのです。それは「今・此処」の一点です。今・此処に基づ

かない認識は物事の真実の姿を見定めることが出来ません。
(現代原始物理学も同じ方法で研究を行なっています)

さて、人の心はウオアエイの順で自覚の進化は進むと申しました。ウオアの三次元を考えて、言霊アの自覚を目指すことによってウ(欲望)とオ(経験知)の現象は自分自体ではなく現象・出来事であり、自分の本体が宇宙そのもの(言霊ア)だ、と知ります。そして次の言霊イ・エの自覚が言霊アの向こうにある、と普通は考えます。しかしそれが地獄・錯乱に導くこととなるのです。言霊イ・エが言霊アの自覚の更に先にあり、そこにたどり着こうとする努力は、その時までの勉学の成果を泥の中に転がすように滅茶苦茶にしてしまいます。昨年夏頃の筆者のたどった道が文字通りそれでありました。古事記には一言「次にその禍を直さむとして」としか書かれていません。道は自分で捜すしかありません。この頃、私の心は混乱し、身体は疲れ果て、食欲は減退し、体重は三十五キロにまで落ちました。七月と十月の二度にわたり緊急入院する破目となったのです。迷いに迷った私に迷いの種が尽きてしまいました。あゝ、こうか、の種が出払ってしまいました。と思った時、私は自分が迷っていたことに気付いたので。「迷ったら原点に帰れ」、私は古事記神話の始め「天地の初発の時、高天原に成りませる神の名は、天の御中主の神。次に……」に帰って、一つ一つの神名の内容について疎かにした所はないかを調べ始めました。古事記百神が教える言霊五十音(母

音・半母音・父韻・親音・子音)の五十音図構造と、八咫鏡を示す立体構造がハッキリと心の構図として、イメージ化されました。更に、瓊速日の神・樋速日の神と、それに続く布斗麻邇の主体的原理である建御雷の男の神の内容が確認されました。と同時に、「天地の初発の時、……から八十禍津日、大禍津日」まで一貫して守られて来た学習の手法即ち現象子音から主体的な母音の方向への探求が、事もあろうに、結論に近い「神直毘・大直毘・伊豆能売」に到って全く反対の方向、客体的な半母音の方向へ向いてしまった事に気付いたのでした。大事な処で私の足は「今・此処」を離れ、フワフワと宙に浮き、さ迷ってしまったのです。今年(平成二十年)に入り、迷妄の霧は徐々に晴れて来ました。古事記の教える人類文明創造の手法である禊祓がどの様にして行なわれるか、の心の中の過程が次第に明らかになって来たのです。一ケ年に近い暗黒の中の旅路が終わって、漸く古事記の最終の結論の自覚を遮っていた壁が消え去り、歴史を創造する文字通りの光の言葉の原理が姿を現わして来ました。これからその言葉の現われ方についてお伝えすることにしましょう。

自力信仰の典型である仏教の禪を例にしましょう。筆者の言霊学の先師小笠原孝次氏は、言霊学を学びに来る人には誰にでも「この学問を学ぼうとするなら、その前に仏儒耶等の信仰の一つを卒業してからいらつしやい。信仰の卒業がこの学問の入学の門なのです」と言われました。そして信仰の教

義については何も教えては下さいませんでした。けれど信仰上の要点については時折大切なことをお話下さいました。禪の修行については次のように教えてくれました。

「空観は得ようとしなければ得られません。けれど得ようとしている中は得ることは出来ません。」

「人は宇宙から宇宙の中に生まれ、宇宙で育ち、働き、死んで宇宙に帰る。常に空なる宇宙から離れることはない。その空を殊更知ろうと思うことは無意味です。ではどうするか。常にそこに住んでいるのだから、それを知ろうとするなら、常にあるものを知らないと思わし、知ることを邪魔しているもの、それを心の中に一つ一つ確かめて行く以外に方法はないでしょう。」

言霊学の門に入る為の修行である「空」観において、先師のこのアドバイス程役に立ったものはありません。自らの生命の本体であり、その住家である「空」を見ることを妨げているもの、即ち自分の自我意識を構成している経験知と、その自我との関わりを知って、その経験知の自我が本来の自分ではないことを確かめて行く行為の中で、雁字搦めになっている自分が一つ一つ縄が解かれ、本来の自分を取り戻して行くことを体験することが出来るようになります。本来の自分が住む大地が回復し、そこに無限の自由と安堵の世界が拡がります。言霊アが存在を知ります。そして人間の行為の一切の現象が現出して来る根元の宇宙、母音宇宙が自覚されます。そして言霊アの宇宙から人間の感情現象が、言霊才の宇

宙から経験知現象が、言霊ウの宇宙から欲望現象が発生して来ることを理解します。更に言霊ウ・オの次元の反省から言霊アの次元の存在を確認することが出来ました。その結果、言霊ウ・オ・アの自覚が心の中心に立っており、更なる反省によって下からウオアエイの順で自覚の言霊宇宙が並び、天の御柱が立つ事であろうと予想する事が出来ました。(仏教では言霊アの宇宙を自覚した人を阿羅漢あらかんと呼び、初地の仏ほとけとしています。自我を構成する経験知にのみ頼る煩惱の身の上から脱却して宇宙の目で物事を見、今・此処に住むことが出来る人の意であります)

ここまでの作業の点検を終えて、言霊イ・エの自覚の話に入りましょう。既に今までの検討からウーオーアと続く母音宇宙イ・エの内部を直視しようとすることは無意味だと知っています。今・此処に起こる出来事を見て、それを経験知ではなく、自分本来生まれた時から授かっている目に帰ることに違いはありません。ただアの自覚と異なる二つの点に気付く必要があります。

第一は、自覚として主体の方向に帰る所が大自然の母音宇宙なのですがそれは又、その心の宇宙の内容を形成する「古事記神話の謎なぞで教えられた」母音、半母音、父韻、親音、子音の各言霊の構造と活動の仕組のすべてなのです。

第二は、今・此処に客体的に見られる事物が人間個人の過去・現在であるに加えて、世界人類の全歴史とその現在の状況も要求されましょう。

この二点のことが唯一人の人間、古事記の伊耶那岐の大
神として行なわれる時、禊祓は完成され、いかなる悪も、
闇も一瞬に消し去る霊駆りの言葉が自覚されます。それが
人間の生命そのままの言葉であります。

言い換えると、伊耶那岐の大神（イ・牟）の生命創造意志
が動き、その瞬（まばた）きが八父韻を動かし、四母音宇宙を剖割させ、
その一つ一つを刺激することによって森羅万象を創造し、現
出させるのです。人間の先天構造は斯くの如く活動します。
禊祓の行法を以上の如く自らの心の中の動きとして知り、自
覚する事が出来ます。かくて天の御柱の自立となります。こ
の時、意識でとらえることが出来ない先天構造が、心の中で
掌を指す如くに明瞭に直観されるのです。

以上、黄泉国^{よもつくに}所産の物事を高天原の禊祓によって最終的
に光の歴史の中に取り入れて行く過程の八十禍津日、大禍
津日の方法を否定、修正して神直毘・大直毘・伊豆能売で
ある純粹に高天原の手法に切換える所の説明を試みました。
御理解頂ければ幸いです。

※

この一年近く、会報は休刊となり、開店休業の言霊の会
でありましたが、その間、著者の精神的探求はお蔭様で一
つの階段を登ることが出来ました。有り難いことでありま
した。それにもう一つ言霊の会にとって画期的な出来事が
ありました。それは言霊の会発足以来続けて来た会報「コ
トタマ学」（途中改題）の中の、第一号より百七十三号まで

の全号（重複を除く）を上下二冊の本としてまとめ、出版
することが出来た事であります。上巻は一号より百号まで
（三六七頁）、下巻は百一号より百七十三号まで（三四一頁）、
共に分厚な本であります。文章の記述は勿論、編集、校正、
デザイン等ほとんどすべて無利奉仕のお陰で自費出版とし
ては割安の一冊二千元（二冊送料共で四千五百円）で頒布
することが出来ます。

筆者は自分の文章が本になりますと、ほとんど読んだこ
とがありません。本にまともりますと、それは自分の「過去」と
なったと感じるからであります。過去からの制約を
受けず、今・此処に生きる自由な立場から文章を書きたい
と思ったのであります。まあ言えばその横着な心が
今回は違いました。印刷所から届いた本を最初からパラパ
ラと目を通してみました。一文章それぞれが違う日に違
う気持ちで書かれたものです。それを書物の頁を逐って読ん
でみますと、文章のそれぞれが、音楽で言えば一つ一つの
楽章が小さい波、大きい波、低い波、高い波となり、あた
かも大きな交響楽を形成して行くように心に響いて来まし
た。「自分にこんな文章が書ける筈のものではない」と正直
思ったのです。自画自賛で誠に恐縮であります。是非お
読みになって下さい。二千年以上昔の日本人の祖先が、現
今の社会状況の来ることを知り、この大きな時代の転換に
当つてのアドバイスと、子孫を思う心情と慈愛の声援を心
に深くお感じ下さるであります。と同時に日本国鞏固

の実状と日本語制定の理論等々の精巧な論理性を心行くまで御理解下さること存じます。

十一ヶ月のブランクを経て会報「コトタマ学」の二百二十七号の発行が出来ましたことはひとえに読者の皆様の激励と声援のお蔭であります。心より御礼申し上げます。言霊の会が今号会報を発行いたしました理由は主に二つ御座います。

一つは古事記神話の伝える言霊学の最終章における「八十禍津日・大禍津日より神直毘・大直毘・伊豆能売に移る段階での、書物「古事記と言霊」と言霊の説明の補足をしたかったのであります。「古事記と言霊」の書の中の神直毘の神・大直毘の神・伊豆能売の記述と共にこの会報の文章を足してお読み下さると便利かと存じます。

理由の第二は、この一年近い会報のブランクの間に言霊の会の活動と現社会の動きとの関係に従来とは異なる兆候が見られ、それに対して会の動きも即応すべきだ、と思ったのであります。そのため、今後の言霊の会の社会への発信は主としてインターネット「言霊百神 <http://homepage2.nifty.com/studio-hearty/kototama/>」を活用するよういたしました。今後会報は必要時にだけ送らせて頂く事となります。それ故に会費はこれら必要となるまでは頂かない事といたしました。毎月開催しておりました言霊学講習会も必要に応じて開催いたします。ご承下さい。

昔、人類は自分みずからの生命とは何か、を追求し、便宜上生命を心と身体とに分け、先ずその心を解明して五十音言霊布斗麻邇の学問を発見し、人類の第一精神文明を建設しました。次に身体である物質の探求を推進し、生命の物質的構造を解明してDNAを発見し、また原子物理学に於いて物質とは何か、に精密な解答を出し、現在地球上に見る如く素晴らしい人類の第二物質科学文明を完成させました。以上心と物の両文明を完成させた人類は、今より新しくその心と物の両文明原理を車の両輪とした人類の第三生命文明の建設に着手する時を迎えます。そしてその建設の主体となるのは勿論人間生命の中の心であります。その心の原理が復活の試み開始より約百年、諸先輩の研究を受け継ぎ、今日此処に完成いたしました。

人の子は人として生まれ、猫の子は猫となる、この普遍の法則がDNAの遺伝子の学問となって証明されました。この不変の法則を基礎として人類は何を為すべきか、の法則が大昔にあったと同様に百パーセント姿を現わしたのです。心と物の両原理を携えて今日の人類は輝かしい人類の第三生命文明の始まる戸口に立っています。人類の歴史の過現末に関心のある方は是非当会発行の書をお読み下さい。二千年間暗黒の心の中に隠されていた学問ですから難解な点も多々あるかもしれませんが。御不明の点はご遠慮なく当会に御質問下さい。受付の窓口は常に広く開けておきます。

(この項終わり)

既刊書紹介

B 6 版 240 頁

発行●平成 12 年 2 月 23 日
定価●¥ 1,800
(送料 ¥290)



コトタマ学入門

日本民族に伝わる最古の学問であり、日本語が作られた語源でもあるコトタマの原理を平易な言葉で紹介した書。

B 6 版 210 頁

発行●平成 12 年 6 月 8 日
定価●¥ 1,600
(送料 ¥210)



言霊

自我と世界人類の問題を一つのこととして考えようと努力する人たちに贈る言霊学の手引き入門の書。言霊学の立場からの随想数編を加えています。当会発行著書の中で一番購読された一冊です。

B 6 版 360 頁

発行●平成 13 年 2 月 15 日
定価●¥ 2,200
(送料 ¥290)



古事記と言霊

古事記神代卷に則り、人類精神の至宝であるコトタマの道の深奥に迫る言霊学の奥義書。

併せて、言霊原理より見た日本と世界の歴史とその将来（歴史編）を載せています。

A 5 版上下総 700 頁

発行●平成 19 年 7 月 23 日
定価●上下巻 ¥4,000
(送料 ¥500)



コトタマ学会報集成書上下巻

言霊の会発行の会報、第一号～第百七十三号までを集成した上下巻。重複部分を除いて構想より約七年の歳月を経て、総 700 頁の新刊本として目出度く出版するにいたりました。

発行所 言霊の会 責任者 島田正路

住所◆〒 104-0054 東京都中央区勝どき 5-4-21-109

E-mail◆futomani@gmail.com 電話◆03-3531-6112

振替◆00120-3-653594 言霊の会

送料◆2冊は ¥340、3冊は ¥500 (EXPACK)

URL◆<http://homepage2.nifty.com/studio-hearty/kototama/>